へ13
3244
4

特
へ13
3244
4

あり。往年月に歌かいつくく題し抑る。斯しまろしと詩ふ。彼扇に人く
春夢婆ゝあとと作し詩ぶ。月夜の内侍の夏なんど。とのひ出あるんど。是
ゝ愚がしくかくく言葉ゝ人

第七

月夜ゝ瞿麦時鳥むくく耻辱成あるゝ

空たきあるいのかれが心ゝ。女も異所ゝ居ゝ。おてゝふくく通ゝこゝ却
く製ても深く互ゝ愛もいやまゝとべ。先おもゝ。彼瞿麦姫ゝ顔色玉のゝ
く虜ゝ雪成ぶざむさの花も姫ゝ月もくも美人ゝあゝの自と。春成かり一乃情
のくまく除く色好ゝかれ性りゝ。江松成禁女夏のゝ一日の業ゝ。
只管婚成ゝくく色ゝ恋が色成ゝ。已權勢成ゝゝんとのく計ゝる。色恋
ゝ夏ゝおりん。時鳥成志のゝ。ゝきゝれ別館のゝのりゝ。ゝゝきゝゝ龍成
姫んゝいきゝ成得ゝくおりん。姫氏のゝゝくく愛ゝれゝゝる。婦女の常ゝ。

まちつく斯曜麦が性なりとて胸中もあれこがくおもへど。如何ゝ詮なへなく。かつも
ぐる時鳥とやらん側女。耻辱成めるに心ありみさんのこと。胃ろろん侍女奴婢成
らひ時鳥が素性成密とさぐりサをさぐる。斯くて已に八月十五日あもなる夜
ゝ。月人の酒盃成らるとへーく。曜麦巴ゝ迎よ言ろろん君ふゝ時鳥とやらん
側室成別館に居ときゝよは。侍女おぐ不何かさうと妾もかくせまぐり成折も
ぐるうちとうく。かくくんとろみ幸ひ今宵ゝ式館にまゆさ。望の夜の月成賞じ
侍らべーと俺ゝさくめゝとて。已ゝ心の底よ表びざとと。分説よ言手なくく
夜よいくゝ時鳥成むくゝ。時鳥ゝいと面煩くく。惶ゝ左右の光景成ろ。
ようづ雲上成やわぶ曜麦がよりくみまをせ。新に造る館りとぐ竹芝寺
の古夏ろめくぐ。雲の上めかくやのくんとおりふぐろ。母屋の庇長押の上。
大和むさろ成考ゝくく。晴のかさの翠簾ゝ鎖子成むくと鈎成ろくくろ

よ捲のげくろ月成見んよの料ろべ。後のかくろ。蘇芳濃ゝちの仮つけろ。唐絵乃
壁代ひきまくし。二階厨子みゝ。火取白銀の篭箸匙鉢俎杯唾壺の箱打乱の
管いま一装の厨子ゝ。梅花荷葉侍従黒方の類ゝ香合の宮二合冊子乃
管櫛の宮ゝ。所ゝ。唐匣ゝ。花形の鏡錦の守行巾ぎ
よ目ゝとれのかゝ。遊むゝ。紫檀の手ゝ。桃儿帳成くく。蒔絵の服息ゝ打
ゝとくれ婦人ゝ。曜麦の方ゝ。べーと。つぐ仏ゝれせーとて。頭成ゝとくく立
る得ゝ。ゝ成曜麦ゝ。ゝと見ゝ。坐成ゝくく自時鳥が手成ゝ。疾ゝ
式館ゝ。ゝ成折ゝ。面成ゝ知ぐゝ。ぐせーゝ妾の本意ゝ。
ゝ。ゝ姉ゝ。ゝ妻ゝ。ゝ無ゝ礼ゝ。ゝ妹ゝ。ゝ憂ゝ。ゝ楽ゝ。ゝ
べーとへくくく語ゝ言葉ゝ。時鳥ゝ耻ゝく。唯口のゝと答ゝ。
ゝ。曜麦ゝ笑ひと舎ゝ。年ゝと若ゝ。惶ゝ。むべゝとど別ゝ客人

もらるれば、ひとりの夏さいと、ぬれ打ちけんまろ。酒ふまくみめるべ
かりけるに白玉盃とりて時鳥よ数杯とりもるうちに真夜中とおぼゆ。
月ハ南よりめぐりきて。影いと冴く奥さいと盞ざとぶ。曜麦侍女とうじく。
錦衣とぶ琴ひくるに琴ひとりとせ。時鳥ぶ前よ押ゆ。内裏人美人ものうしろ。
ぶ人もまとしと世。一定琴ひ糸手ひとめ。常陸ひ東屋ひくも。管撥ひ奥ひ
塚へのひねとひくれぶ。時鳥ひ打ぶひ。ひるおかけぬ仰ふぞなべれ。
土生小家よく成長ひ妾ぶ。ひぐ琴ひくひ支ひひとべさぞ。ひ美ぶひ許さ
ぞ人とさいひふけぶ。曜麦ひ日ひ業ひ侍ふめいひとめ。其業の
熟せざるに、ハく常言ふも鵡鳥ひる鳥ひる。つめひめくとひいふ。回ひど尚
おく床敷其琴の乱ひぶ。手ひ乱ひぶれとおぼえ侍る。松風のひも勝ひ。
滝ノ糸やひいんと。琴五六面ひとせ。只管ひ鳴ひ時鳥ひ実ひ琴撫

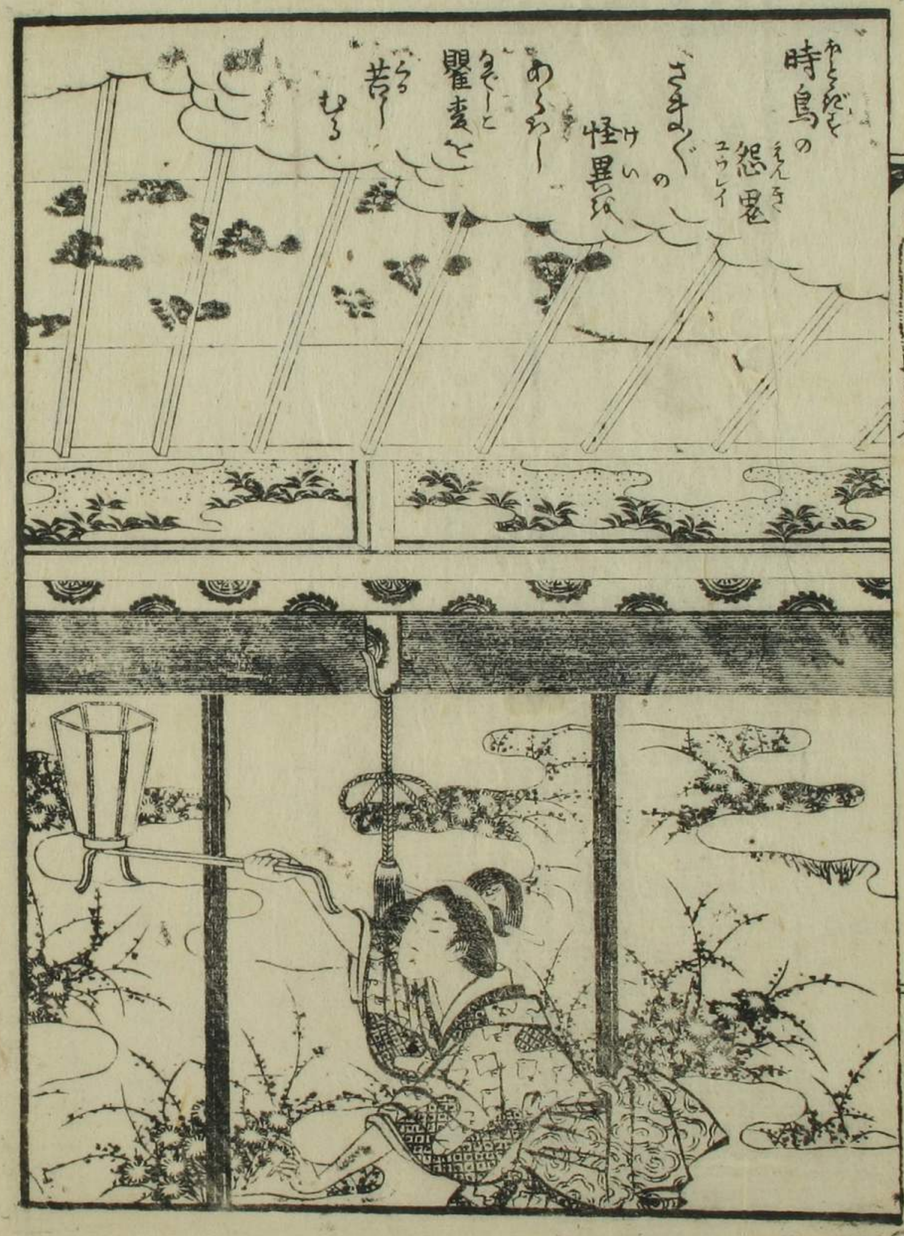
支とひひ得さとぶ。顔赤ひひく。暮ぶ言まもひく。少時めく先ひも
ひぶ。僅ふもひきおぶえ侍ぶ。上の仰ひつもひと侍ぶ。耶ぶ丹波の
国の田舎ひ。ひ糸操撥鐵賤ぶひ。ひぶえ侍ると更ひ
白地ふ其身の耻とゆふる。曜麦ひ腹ふこと顔ひひ。唐土の白牙ゆえ
ひ。同人ひ。ひ法師新ひと傳ぶ。妾琴撫ひ。おさめ上ぶ。妙手ひひぐ撫
得ひ支のめ人やと。謡ぶ。譜べぶひ。侍女の其中ひ。ひ琴ひ。
ひひのもの上ぶ疾撫ひべ。栄の蓬ひひ。池の魚のおどる波ひひ。
の名手ひ知ぶ。大名の側室ひ。琴撫ひ。腰折歌の一
首二首ひ出ぶ者やのべと。飽ぐ朝唄ひ。侍女の悪さげひ。
ひ。青鳥の広方ふひ。琴調のひひ知ひねど。哥ひひくめひ。
風説ひ世ぶひねと世ひ。曜麦も微笑ひ。曜麦ひ微笑ひ。ひとぶひの辞退ひ

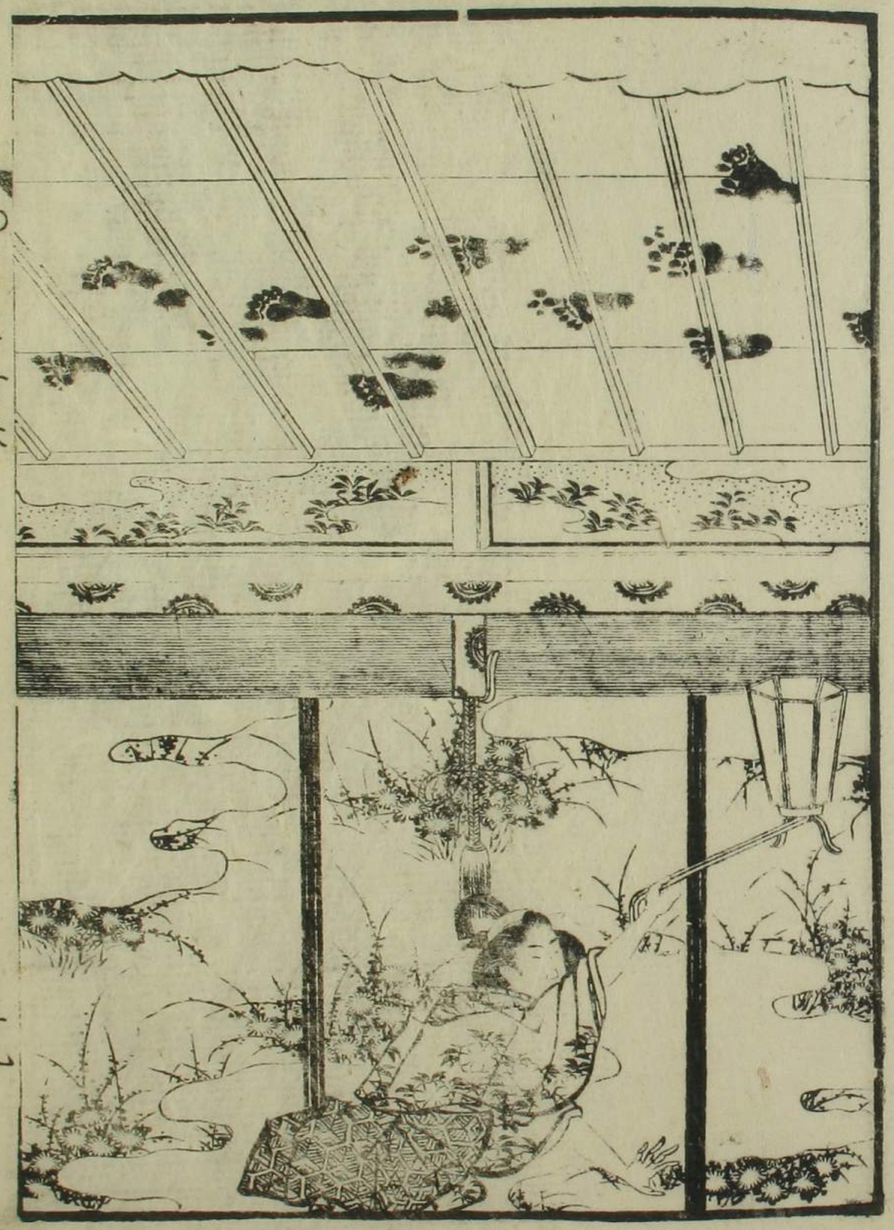
きゝぶるとゝをそひつと今宵の月に題をくゝり哥をせんとて侍女
打笑ひ。如くゝ何宮よや。時鳥の比方を三十一字のうたゝめんと。田舎日者の
訓ひめうく。順礼をとゝのへ式をもうけ。散動をとゝのへぬ。瞿麦を不
審き面ぶりしく。催馬楽早行々耳ちとれど。其須礼をとゝやえんを式
きくとゝもぶくやうつと興めれをふこそ。時鳥らひくらと言ひ。時ちん
消めいくれそひまそ。ゝふゝ落る涙を両袖よりをかね。答めさるふ式屋を侍
女ふゝきめたく。水盤の柄杓ちう素。時ちが手ゝこゝ。まつ式ちを紙ひ
ゝ。反撰とゝ衣ち。式に鎧をめぐとゞ詮をんゝをくゝをゝ位居を式彼
方へきやり式方へ押やり。種くゝ嘖さいちめぶ。時ちを堪ちく中ふも悪さげ
ゝ。ぶくと肥る侍女ぶとくる手式振ちち。更ゝ力と用れやをもく衿首
つんぐ五六間廣庭ゝ投退ち。残ゝの侍女大ぶ。左右ちり取つく。兇介

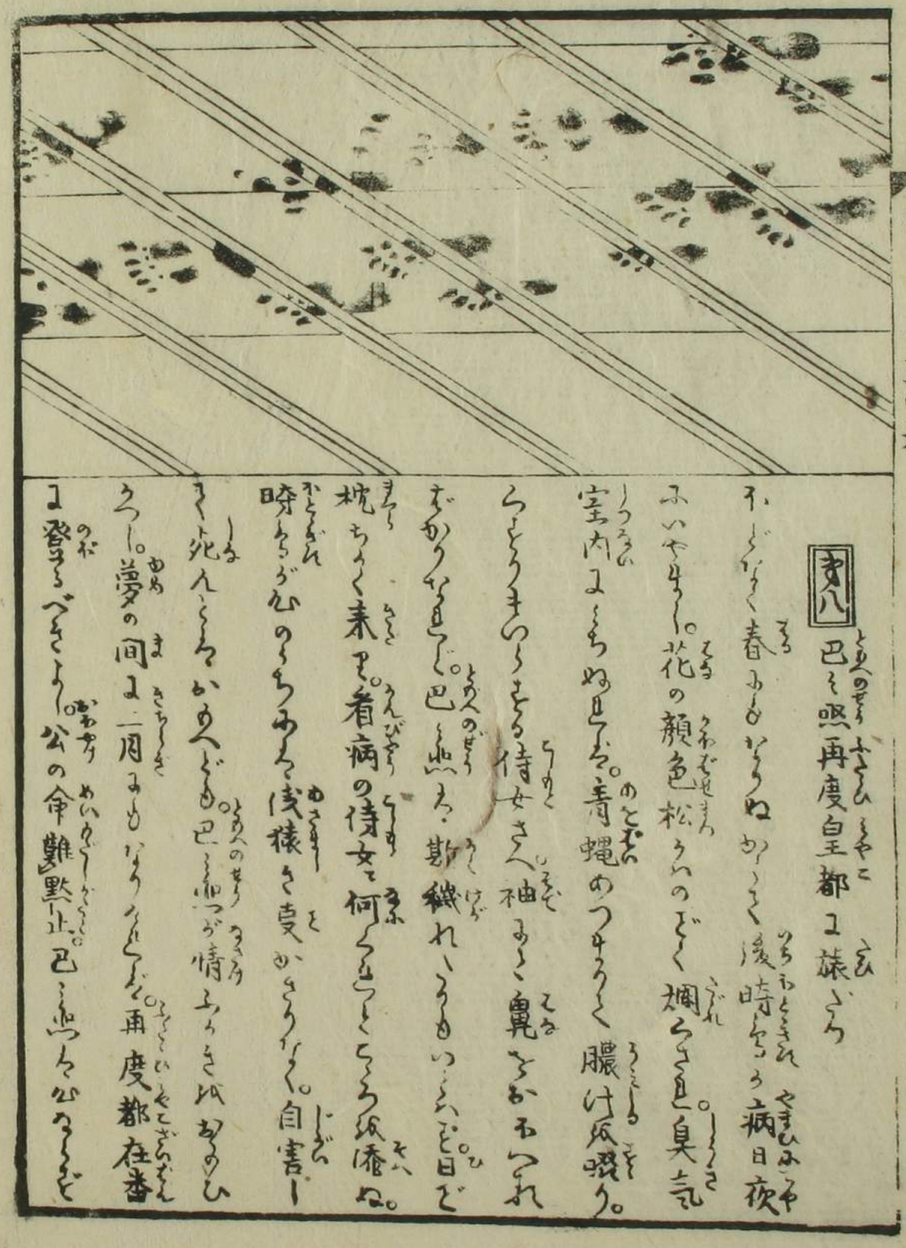
つゝ楊の枝ふる比ふぐ。かゝをき晩とさゝの巳。或ゝ帯式つゝ。或ゝ胸さゝ式取く。
須臾の間ゝ皆庭先ゝ投つけ。何方ゝもなく皆ちゝくゝ逃ぬ。唯瞿麦
一人のゝとなりぬ。時ちい莖ちちさゝ。瞿麦が側（ゝ寄ぶりふの四ちり。賤の女の
妾式めぶり。琴停ゝ哥ちゝと嘖めふ。推夫ゝ海の路式ゝ海士ゝ深山
案内とやく。非道とやふつき。夫愚者ゝも必ず一往のゝとゝいや女といふ（ゝ武家
住ふる妾ゝ式ゝの武の道とゝ公ぶけ住ゝ式ゝ。ゝ多勢の侍女と相手くゝせど。手
ちゝの一人もなく。以前ゝ雲の上人ゝもせよ。今ゝ賤間家の奴こゝ式ゝ長刀小
太刀ちゝ式ゝ更ゝ。弓馬の道ゝ公ぶけふとおぶえ侍ゝ。何ゝものゝ無礼なゝ
とゝ。相手ゝかりまつゝせん。先碁一のきとめせと。めうの碁盤ゝ盃と乗せ。左りゝ
手ゝ大指と。食指ゝくゝとゝ式おさん。いとゝかるぐゝと瞿麦が目さきゝ突つくゝ。
式力ゝやおとちん。瞿麦さゝ言葉式も出ぶ。時ちちちん。今ふを

めは敵氏錦をうせ来れ其時や。良人よかりしく討死せんこそ武士の妻の
本意なり。哀〳〵口〳〵ゆや似れなく。力なき侍女ホ今時なら帰館なり。
何人ゆもめは。出人合くとぐめて見よ。愚なる我唐人を知らと。琴調く敵氏
防く討東めらびゆせくよ。時なら竹橋めくと家来を呼いは。饗宴今釈
なり。徐ると立帰しなるやぎたる酒盃まく。かくまく恥辱紙めくられ一時
の怒る乗じ。如こ彼罵くさはば。自害〳〵死亡んと覚悟ときゆめ。病なる
ようひとく巳の閨房に一竜ア。めぐて屏風ひきまわしめは夏ども書を。
心彼まづめく懐剣ぬきうち。自害せんとかとおつる。巳恐々走ぐ。
懐剣もちし其手ときぐ。かくめくんと呂ひしゆ（西方より）氏ホ代一斤を悪び
来る。さんようの一二アを低門のめかくこ出くるぞ。奥曜妻ら不良きふるなし。
ときとる後堂へあく。今や出んくとおりひしぐ。却く我彼所よめん。西方が

ふもも悪しかりけんと。眼彼ふたぎくきのびしぐや。自害せんと。かくまろね理ふる
似るとでも。去頃ら月水もとまる。酢きうの氏嗜と歩く。若懐胎もまるとし。
腹なる子ら不便とら思ゆるやと。さはくふ言和むとて。時なら唯候ふ見頭氏
ふくく兼引ざる面めらもしぐ。不思議なる我持なる懐剣とりかし。五躰俄ふる
ひいぐ。悪寒覆熱ふるみもどく。更る人夏ども知らぐ。其ホ不倒見伏巳〳〵
ふる侍女の介抱ふく。漸く五三日氏住く正気ふるもて。腫物悩み間く
いぐ。むくされぐふく腫のぐふく巳〳〵出ふるふくもどろき。医を招きを見せ
まひれ。何等病なるや正ふるや。知見めくるもで。是俗ふ言ふ疫癩なるべしと
答へるぐ。巳〳〵出ふるおくきとふ。時なら かくと歩へ。自害せんふる吸定せうと。
唯疾毒ふる攻せ〳〵腫物ふるもて。近ふる愈べしと。金氏いとんぐ医療
年氏ふくしふ

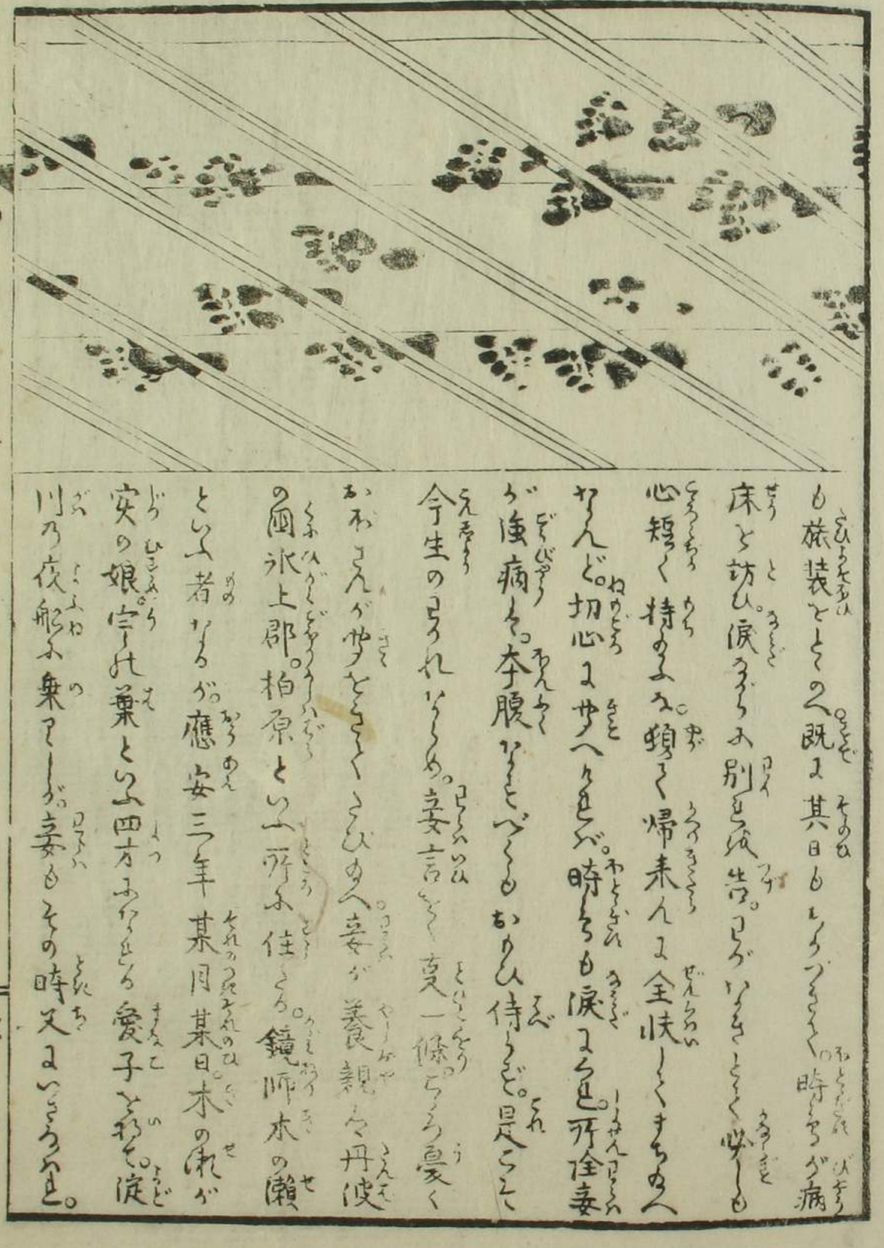

かくれたる
時鳥の
怨霊
さまざまの
怪異
あらわれ
たぐいと
曜変と
苦しむ





第八　巳ゝ照再度皇都ゝ旅さろ

おじなく春ゆくころぬ。めくく後時ちろう病日夜
ふいやち。花の顔色松ろいのごく烟ちさ且。臭気
室内ゝちぬ且ち。青蠅のつちろく膿汁瓜喫う。
らとろまのくとろる侍女さん袖ゝく鼻をおわつれ
ばかりなる。巳ゝ。斯織れくろもいゝと日ど
枕ちく素ゝ。看病の侍女ゝ何ゝちくろ紙添ぬ。
時ちぐ心のちゆちろ伐様ゝ変かろく。自害し
ろう。夢の間ゝ二月ゆくとど。再度都在番
ゝ登ゝべきろ。公の命難黙止。巳ゝ。ゝ公ろくど



も旅装ととの。既ゝ其日もとろづくく時ちが病
床ゝ訪ひ。候ろゝ別ゝ伝告。ろぐりきくく必しも
心短く特のゝ。頻く帰来んゝ全快しくまちのん
かんど。切心ゝ世へくとぐ。時ちも候ゝ且。所仕妾
今生のろれいくの。妾言くく変一條ちろ憂く
ゝ虫病ち。李腹ちとづくもおりん侍ろど。是ろと
おわろんが夢をきくくろびの人妾が養親ゝ丹波
くふの国氷上郡。柏原といゝ所ゝ住ろる。鏡師水の瀬
とろくゝ者ゝるが應安三年某月某日。水の流が
突の娘。宇礼葉とゝ四方ゝふとろる愛子ゝ。候
川ろ夜船ゝ乗てしが妾もその時又ゝいろろ且。

同船より乗合の彼娘とのそゝ屋るあるとも如此くこの騒動より燈も消えたる善悪かきくどき妾を娘宇より乗とあろゝ其場逃ぐるひ既のびくゝ心もあくく熟見もとゞ。木の陰ちゞめく娘なるぞるみおどろき。妾も又父をゝざる夜尺て悲しかりしとも。今ふくおゞえ侍れ僅に四才の年ゝとゞ父の名も所もちゞ。詮ぐさ彼木の陰が養女とゝ。名氏もてのまく宇れ養ゝ。成長ゝなしゝとゞ。父をゝゞ世と去り。母も邪見の性あく。他子乗子と疎く果ら れ逐ゝ於女ゝれんを必宮せり。疾代家氏既れ去れ。近郷の者共言葉ゝ道ゝね変く知ゝも。唯一人冊波の間ゝゝ生く。かねく木の陰ゝ語ゝ淀川の夜船ゝく。我父のものいふるさ生奥州の訛ゝゝ乎ゝとゝ奥州へ下れゝ。花も月も尽ゝ逢ひまつゞせ。名氏ぶつくく歩へざしゝ。時雨の音ゝ妾が名とゝゞ。ゝゝ宮の子ゝ子ゝゝゝゝ時雨。海き因縁のあり伏れ

もいと不思議なる百万歳も此寿のそのかちに妻が父なめらるひとふ実かのよはし
なふ語りやせのく妻の方みを證拠とするべき品もなけれど。彼実の字れ業がおれ
ると弁ず。世ふまとてる無夢錦一寸八分の正観音。此二品ゑ物ら屋れ女
の養親ちと妻ぐ実の父まくおつとそやや。母ていと幼き時よかくとのも一人
れ姉ちめ已夏のたおろげみおぞえ侍る。かれ俗病ちけつる。義理あれ母乃
目ゑ掠ちく亡年なり。剥賊の刃城もろ〳〵ちんど。伝歯をけづし侍る罪ちくめ。臓
けこ織とる手ふーのとく眠さとる夏さん仏ふ伝せび。枕ふちのれ者を涙
ゆうちねでのりと数ちく。四ゑ点ち時ちがちうなき物語ゑ物ゑ。いとぐ不
便もいやまーぬとと。くくくち果じと仏ととげせし市男が実の父姉ちと奥州
のあとあとと。尋得ぬとふるもあ〳〵じ。頓ちく對面ちくさせんめらぐ力ふと
さどと良生ちとべーと。さきぐこ心とちへ。旅の空へといそきろ

後編 巻端

東関隻時ちと殺し時ちれ怨鬼躍妻成若一ちろちろ
既ふ書ちくうれど剥刑師の工ちるちと書房ちとこ
慶兒のとゑ成ハちづで後編ふ物ちぬ出のちく言葉ふ
まんちる成見のふべー

浅間已ゑ点良治ち。都在番ちりひちくれど。仏更ふ物ちぐ我當国ふ来ち
ち後曜妻が妬心ちく。側女時ちれいちと憂目や元ちくんなくおのひちぐし。尼
眷古郷のくのんどちぐ〳〵学窓ふのく階ち居ちちる心れひとちれちく人と對話
どちく〳〵ひ。住いれちくゑて五月も末ちなぬ。家臣ち已ゑ恋が物おのちしく頼ちる成。
且ちちちちゑちちちる点ひ。ちくくくちと頓ちく旁ちとなちちんちと必定ちち。ちれ期限酒
の毒ちちも却ちく気成保養のちとちくくもなれべーと。密ふ心ちちちの白歯者成
ちくく〳〵ひ。それくくの納涼ふちとち。ちのびちふ館と夕暮ちち立出徒者成べち見

風俗新形御あかり柳原住文

かすめとられたる長きくのたばこいれ
なぎくをもつくむしたる中
しくかえ人夫どいきやうとうの色
北斗老師のもとゝ高坂めんも
ちんぐさ山さうさぢ夫夏より
おひろめ十イまゝく當夏
もちづしき丸ぐさいろく
くゝ仕四月ちぐもつゝゝを用
ぶ中ひ百多少ゝゝをい用
こ作付ゆやうまひねびしさ
まつてイ

千住小塚原町
松屋店

巴之亟五條坂の花街よりゝ
ゝぶゝく逢州よりゝ
御所の五郎花巴ゝ
慮外ゝる
愚棍坊
投る
ところ

のとゝいろ〳〵飯しめ。五條坂の花街よりくる。巴と亜々常ふめゆこなとゞる大路なと
ゞ。往来の人も目なとざる支のく多く。足もいとかろ〳〵おろ〳〵く。堤を下り大きなる
娼門氏をゞ出ゞ。めまくれ抜女の客まち類なるが。茶屋が机床より腰うちかけ或々
門前ふかく出つ。只管よりれと惜ゞ。又の逢夜をちぎるもの。或々まれの見知
とゝろこび。手紙ゝろさんく樓より登りめり巴と亜々今ひらゞくかれ光景氏
見ゝゝ。古今れ人情かゝなく。彼客ふ〳〵しゝ。ふのーかんなどふひつ。ふと
うきなゝなゝ。彼方となゞめ氏方氏へてゝ。漫行ありしも。氏地の悪棍巴と亜が佩
刀の柄より袖をゝ引かけ。會釈もなくかなゞゝく行とゞゞ。巴と亜白蚩者に向ひ。
其奴慮外者なり切とくゝと言ゞゞ。彼悪棍が衿をびつゝ。投退んと聞く折
悪棍同子と見へつる男四方より走めつゝ。巴と亜主従を中ふとりたゝ。無二無三
こゝろくゞれ。ちゞめふも言ゞく去のびゝれ夜行なゞゞ。従者氏をゝ〳〵只三五

人の白蚩者。悪棍の多勢より敵しがゝく。既に危く見へゝれ所へ一個の侠客草鞋天のゞ
く走来ゞ。行端より悪棍を取く投退巴と亜を後よりかゝび。是あを止支ゝゝ浅間某
の君なれゞ。氏後無礼をゝゝく奴等ゝ。一人も侍く敵ともゞと言ゞゞ。悪棍ホ
も彼侠客が力量ゝ。兼くおゞゞ居れ支とおゞゞく。猫を見一嵐のゞく皆散ゞ
ホ逃行ゝ。爰より又忘見ゝゝ氏花街より責ゞれさゞ。今々逢州とゝ全盛の太夫ゝ
ゞ。氏所彼通りのゞ。浅間の君ゝゝ世ゝゝ。茶や良治公ゝゝ人も知れへゝゝ
と。自巴と亜が手紙ゝゝ。氏方へ来ゞめへと。ある茶屋より誘ゝゞ。彼侠客も巴と亜
が白蚩者と打連同ド茶屋ホ到ゝゝ。氏侠客々御所ノ五郎蔵とゝ者ゝ巴と亜
より何等係ゝゝ。詳ゝゝ支々後編の首尾よめり。後兒の期氏待得ゝ〳〵の〳〵ね

画影草紙三之巻尾

おもかげざうし後編

近刻三冊

柳亭老人著
蘭齋主人画

巴逢州が許へ五郎兵衛逢州成敗一分説
切腹する夏の星影土右つが浅恵寄居宝袖乞と
花都へ来て逢州が殺されとつれと街説よさく。
花蛙々もも知らぐ。めふとらる曲子よ捧ぐ。四つぐ合
せく花街代くさひめうき実の母ゝめぐりのふ夏又逢州が
袖ふ亡魂くすくく香のくふうよ再びとぐくとめうつとん
富本常盤津のたくくく李氏のくしく偏ゝ是と
戯場の狂言ゝ比せぐ前編々大序ゝ第一番め大づめふく
後へんゝ第二番序幕ゝ大切ふ至れが